復讐奇談　安積沼　一

ろ

上
弐百九四番
五冊
浅文堂

へ 遠 13
1856
1

遠13 1856 1-5

享和癸亥發兌

東都　醒世老人山東子著

復讐奇談 安積沼

全部五本

一名　小幡小平次死霊物語

寶善堂繡梓

永清

一日清閑一日仙

安積沼奇談引首

寛政庚申年蒲月。山東生有小恙。穿鞵擔囊。單身沐浴於熱海温泉。客店中盡是鑾子蠢翁。殊苦說話無伴。不免連日納悶。抱膝兀坐。一夜對燈披巻。忽聞鄰房裡有讀書聲。就窓寮間張覰。原来一位娘子。對燈披巻。年紀三十左右。天然美麗。不假塗抹。早知窓外有人。叫了鬟。相詰了。鬟認得我面。報道原来鄰房客子。時常讀書的娘子

隨即叫丫鬟相近我逡巡不前娘子親口相呼道客中無伴不妨一話方纔入坐音吐鏘鏗辭令典雅談多經史子集事語夫之乎者也字在漢爲曹大家一輩人在和爲藤式部同流人當夜喫茗酒論古今閑話休題自此之後娘子也喜説話有伴朝夕叫丫鬟相邀一日忽相詰道你莫不是山東京傳哥哥麼我到這田地也瞞不過那娘子只得道是也是也娘子道莫不是妄作稗史枉費紙筆的山東京傳哥哥麼你只知盡名可貪而不知無實用之招禍你所費者紙筆所災者棗梨紙筆可以換要緊言語棗梨可以傳聖賢名教你今把等閑無用之事費盡打緊有用之物夫紙筆棗梨亦皆有神存爲鬼神惡無用費物你從来貭罪於鬼神多矣你只知醫小恙而不知醫大恙嗚乎不亦顛倒乎自今以後凡著作要有些實用不涉名教者斷不

要費紙筆災棗梨賤妾有筆記數冊生平隨聾隨筆或聞之羽人劍客或聞之名儒高僧凡不渉名教者畧不載策今以贈足下或足以資足下著作之料歟這幾句説得我喏々連聲双手接冊子揣在囊中千恩萬謝磕頭告別穿鞋揹囊回東都了原書文字也有用漢文的也有用咊文的茲抽其一篇衍義通俗叫看官一日通曉看官聽説這幾回小説復讐奇談有分教

岳丈擇坦龍陽㺕
孝子復讐山神廟

享和三年癸亥夏五月

東都　山東主人題

醒世書印

比能孝子今々在
小説描成已幾
年誰丗老人新
奇筆孝文傳
事々長傳

一枝閑叟

誰昔稗官録紀事
求傳房國孝兒彪
玉君精細能尋跡述
畧搜奇勸懲存

蘭洲東秋颿

復讐奇談安積沼

總目録

○巻之一

第一條 處女孌兒懸想画中人事
并菱川師宣能画時世粧事

第二條 美貌孝兒售身救父母急事
并死賊手舊家失寶刀事

○巻之二

第三條 穗積丹下感孝義贖少年事
并游俠二見村西開祢宜町事

第四條 鰻鱺太郎兵衛小鰭小平次事
并了然禪尼相波門説因縁事

○巻之三

第五條 希婦細布暗媒佳會事
并信夫摺絹注血告想事

第六條 小鰭小平次巧嚇賊僧事
并山井波門月夜斬惡棍事

○巻之四

第七條 暗夜避狼兒左九郎悞行事
并小平次於安積沼淹死事

第八條　小平次冤魂苦姦夫淫婦事
　并　五指五金終有報事
○卷之五
第九條　蔦雀凸窟賊醫屠人肉事
　并　蝕活地獄美女嘆薄命事
第十條　脱虎穴避龍潭波門報仇事
　并　榎本其角復花之句事

安積沼總目録終

小幡小平次死靈物語　復讐安積沼　巻之一

東都　山東庵京傳著
　門人　緋田沼午校

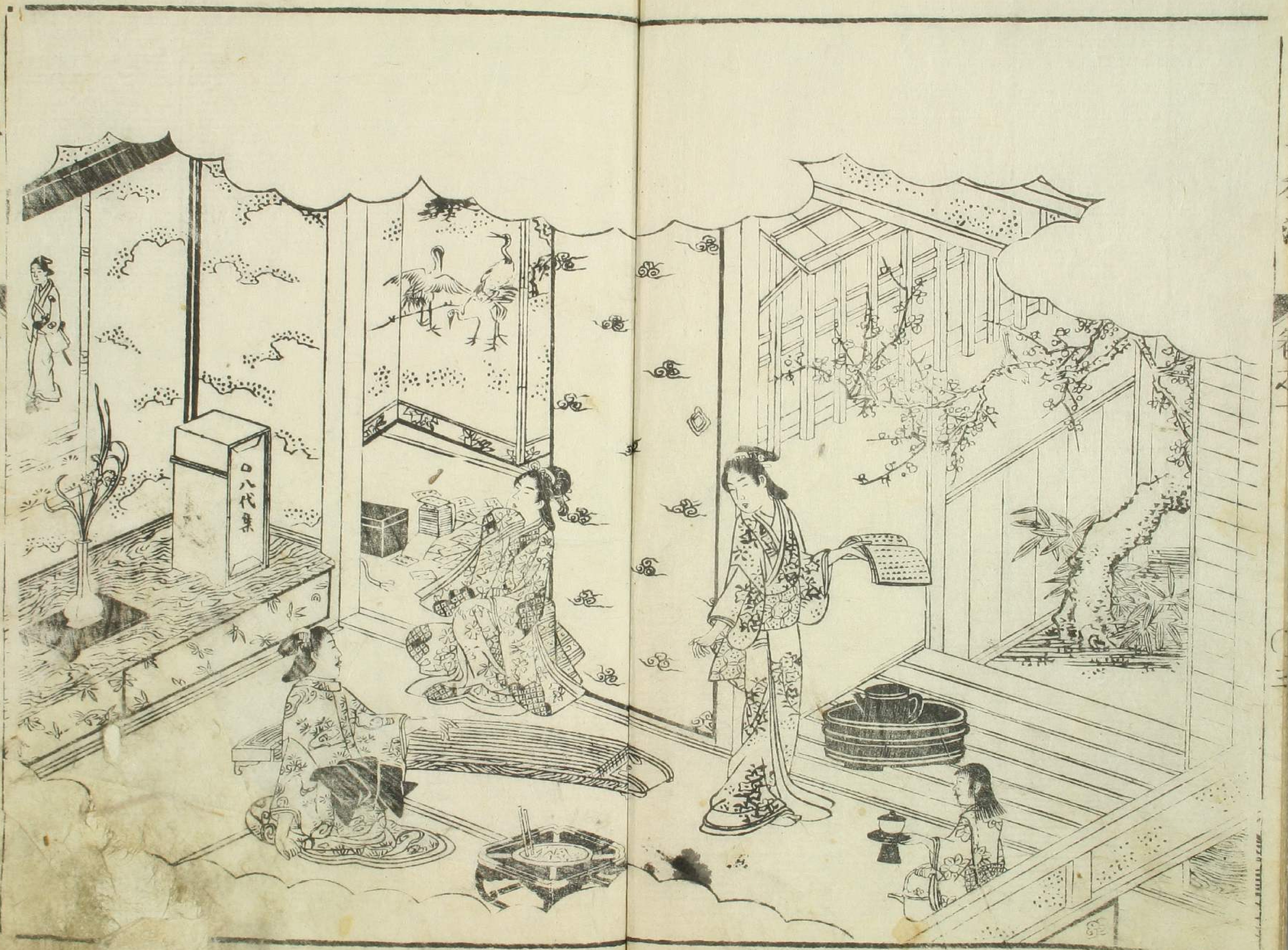
第一條　處女鬘兒懸想画中人事
并　菱川師宣能画時世粧事

いづれの時代の事なりけん。大和國十市郡耳無川のほとりに。穗積丹下正辰といふ。郷士ありけり。先祖ハ播磨の赤松に仕へしが。嘉吉の乱に彼館を去て當國に引退き代々此所に住て山林田庄おほく家大に富ぬされバ村人等。穗積の長者とよびて敬ひけり。ひとりの女ありて鬘兒といふ。年ハ已に十五歳。沈魚落雁の風情。羞月閉花の標致あるのみにあらず和歌絲竹のうへも暁しからざるハなく。いとやさしくうまれつきぬれバ。父母かぎりなく

くしみて唯掌の上の珠とあいしていまだ嫁のさたも議せず深窓の裡にひとゝなりて権に人にまじはることをも許さず養ひけり。丹下ハ曽て書画を好みければ久時勝欲筆の姿を画きたる軸物を求めて女が慰にせんとてあたへぬ。嬰児よろこびて閨房のうちにかけおき常にながめて楽ミたるに此繪ハ其比名画の聞え有る菱川師宣といへるが毫を尽して丹青を施し。玉を欺き花をもはづかしむる計りにうつくしき少年の姿をかきなして神彩飛動まことにいけるがごとくなり。絶画の神に通じるにやありけん。嬰児がをさな心に若女の中にかくのごとき美少年もあらんやと。偶思ひそめしが。ひさをそらせ絵姿に懸想し。しきりに愛慕の情を惹てつひに病とハなりぬ。父母ハ大に驚て良医百薬を尽せし。露ばかりも験を見ざりけれバ。家内こぞりて愁ふること限りなし。病の根いぶかしく見ゆれバ。母親暗に婢女等を近つけていたく嬰児をこゝろみるに。何やらん想ある由なり。婢等その由を知らバかくさず説べしとしく問れバ。婢等ハ事をつゝみかくさず。彼絵姿に思を懸て病の種となりたまひしありさま皆語りけれハ母ハあきれはてにおもひかけぬることにてあれバ。しばし言もなかりしが。嬰児がそばによりていへるハ。婢女等に向て其方が病の源を聞しれバ。いとしくらうたげなることなり。的とさすべき人ありて恋慕ふハ例しもあるべし。絵にかける人の姿を見て権にも心を動さるゝ。喩言にハ云つれども実にあるべきことかハ。人にきこえなバよき笑種となるべし。世間とかくさる事なきにしもあらねどもかく痴情もあるぞと思ひをひるがへしなバ病も自快なるべきに。父母のかなしみをもさだかに思ひやれといひて。或ハ呵或ハ泣。詞を尽してさとしけれバ。嬰児ハ唯面をそむけてなかりて返答もせざりしが。暫ありて顔をあげ。母上の宣ふこと皆ことわりに當れり。わらハも愚なることゝハおもひ候へども。いかなるあしき報にや。絵姿に想を懸的

なき恋にしまどひて。去がしもそれを忘れさし。よべの夢に日比たのみまゐらする観音菩薩枕上に立せ玉ひ。汝が望をとげんには東国をさしてゆけよと告玉ひぬ。はらへのお情ふかく彼地をさずけさせ玉ひて。もし絵姿に似た人あらばむかへ来てさび玉へ。一度まみえずば御傍に死るともちりぢりも恨なしといひて。若しさもなくばさも打忘れぬのやうなさきを告させてえてたゞ涙に咽びけり。母親はせんすべなくかくばかりしと夫に告て思案いたしけるに。丹下も呆て言なかりしが。丹下思ひぞきて打うなづく。女が志愚なるにいひながらむかしは平相国清盛厳島弁天の像を夢に見て懸想し。近くは隠士千代鶴といひし者石山寺にある紫式部の画像を見て眷恋しける例もあり。愚癡なる女の心ならばあながちにもあらじ。かゝる珍事のいでくるも皆前生の因縁なる。観音の御告も拙ひ合する処あり。今東国に男色盛におもむかれて。あまたの美童ありときけば。彼絵の如き少年も有まじきものにあらず。我これより東国に立越て美少年を索出し。汝が命を救はんと心を決し。人の親の心は闇にあらねども。子をおもふ道のいそがはしく。俄に旅粧をとゝのへて。両三人の従者をつれ彼絵姿をたづさへて自関東へぞ下りける。

抑菱川師宣は俗称を吉兵衛といひ。代々安房国平郡保田村に住居ゐね。父は縫箔を業とせしが。師宣は幼き時より絵を好み。此辺鄙に生れて学ぶべき師もなければ。独の心ろに浮世又兵衛が絵を索て其筆意に倣ひ。みづから浮世粧を画てつひに一家をなし。浮世絵の始祖とよばれて其名一時に高く聞へぬ。一日折もよろしき武士遠国の旅人とおぼしきが保田村に来て菱川が家をたづね見んことを乞ければ。師宣家にありければ彼旅人をむかへて対面し。まれに一礼おわりけるが此旅人は乃是穂積丹下なり。但未姓名を告て後従者に持せたる

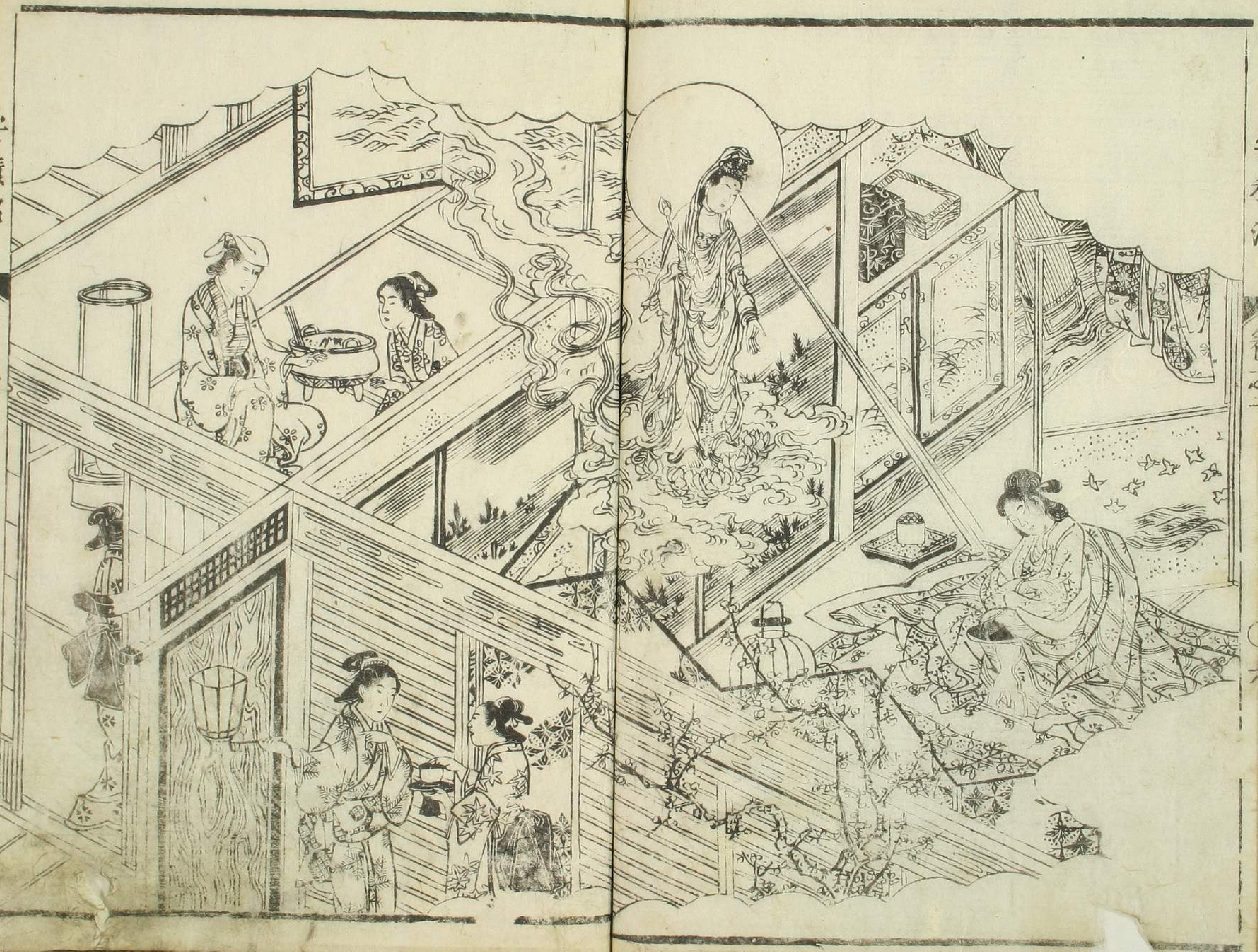

ロ八代集

怪物をもつて師宣にみせしめ是ハ足下の筆にまぎれなきやといふ師宣怪物をひらき一目みるよりも此絵ハ何として貴所の手にハ入りたるぞや又図あひぬる事よといひて涙さしぐみぬれバ丹下いぶかしく膝をすゝめて足下これを見て愁る色あるハいぶかしき事なりさだめて謂あらん説聞せ玉へ師宣いへらく此絵につきてハいと哀れなる物語ありいで咄せやらん暫時くつろぎ玉へといひて自烟茶をすゝめてすゝれバ丹下ハ心中に果哉とうなづきて師宣が説話をぞ待居たりかくて師宣説けるハ元禄の頃当国那古村といふ所に安西喜内といへる武士の浪人ありけり先祖ハ里見家につかへてよしある武夫のよし喜内ハ上に老母あり下モに妻子あり都て四口のくらしなりけれバ貧しき営生をもなし里の子等に手習ひの読書を教てわづかの謝物をうけ妻ハ折々浜に出て当国の土産浪の子紐苔のさゞひとひろひあきなひの價にかへてはかなき煙を

たてぬ児子喜次郎ハ此年已に十三歳世にまれなる美童なるのミにあらず聰明怜悧人に越たれバ貧中にもさま〴〵の藝を学ばせ手習学文剣法柔術ハさらなり我に学びて絵をかき小舞謡曲笛鼓のならひまでも尽く暁しぬ末々のち〳〵ハ能君につかへさせんとしてかくしてと父母ハ唯彼が成長の末をのミ楽て養ひけるが彼が出世をまたらん為に江戸の住居にうつるべしとてその心支度ハ為一なから老母妻ともく住馴し所をはなるゝハ老の心ざしなれバかつも権柄さて月日とゝをくらし思ひけれど老母病にふして漸〳〵れ快りしぞ天人なる喜内ハ孝順の人なれバ甚愁ひてねんごろに看病におこたらず医薬をさつさと良医をえらびさま〴〵に尽しけれども露ばかりも験なしかゝる辛労の余りにやありけん其年の冬の半にいたり喜内偶脊中に癰を発し其痛堪がたし初のほどハ母の病のさハりならんと隠しおきしがかくしおくべきにあらねバ漸く肉に腐入りて

痛ミ日〻に増り。さりとて癒んとハ見えざりけり。母の病を煩つけれバ。母の是しさん病ぞうけ。日〻の費ハおほくなり。されバ貪き身の素ゟ余のたくハへなく。坐して食へバ山も崩坐して飲バ海も乾のことわりなれバ。まもなく困窮しつ。少しも所縁ある方へハ合力をこふべし。いさゝかせし諸雑器もことごとく売代なし。夫婦が着がへ衣の物ハ更なり。食厨の雑器飲食の器まで。ミな米銭にかへなして。草根をもくらふべき家内ハ唯あらぬが如くなれバ進退爰にきハまりてぞ見えたる。一夜老母のさやくごと寐いりたるとうかゞひて。喜内声をひそめ妻に説ていふやう。我輩ほど果報つたなきものハあらじ。貧苦にせまるのミにあらで。母の病我腫物しも医師のいへるにハ母の病ハ中風なり我腫物も腐つりいづれも人参の功ならでハ救ひがたし。別医にも又みせられしかや逃路とまとむる言。さもあれ内に四口の養ありて外に半粒の助なく朝夕の烟さへたてかねしが。襟べさをひ死しする者が蘇生枯木に花咲が

發じそへいでる高價の薬をもとむべき術あらんや。かくしれバおのづから。母人の看病もおろそかにて心の外れ不孝となりけり。兼て其方にもはなしゝハ説りつれど。我曽祖父ハ里見安房守義弘殿につかへ安西伊豫と云て誉ロ高き勇士なりしが。義弘殿下総の高野臺に於て敗軍のおりから主君の身に代りて力戦し。長禄七年正月八日つゐに討死をとげて義名を残しける。其祖父曽て軍功ありしかバ。義弘殿感賞して里見家重代の宝刀文劔大功鋒と云ふ太刀を賜る。是乃今我家に傳る所の太刀なり。此太刀を佩る時ハ妖怪狐狸のたぐひも恐をなすなど不思議の奇特ある事其方も知る所なり。その余さまぐの兵器を先祖より傳へたれども近年衰ひて困窮して残りなく売代なし。唯彼太刀のミハ秘蔵せしが。母人病にふし玉ひしよりことさらに窮し。外にせんすべもなけれバ其方にも知らさで。彼太刀を証文に書入て金



子を借うけ。當坐の用にハあてつれども。猶人情を知らバ。我雑役をつけさせて。今の返済いできざれバ太刀を渡せと責られしあまりて。なんぞ防ぐべき言も尽たり。児子喜次郎ことハ。かねてよき君につかへさせ。家をおこさんと。それのみを楽しみにうき年月をおくりつるに。彼太刀を人手に渡し。先祖武功の證を失ひてハ。児子が出世の時に輝かすべき便もなし。とても武運に尽たれバ。我ハ今宵腹切らん爽に死んと心を決せり。我死せしと聞バ。債人もおもひあきらめて催促もゆるさるらんさあれバ太刀も失はず。我持病の一苦もまぬかれて。母人の身もやすかるべきにあるまじ。母人ハ健氣の人なれバ其方ハいかなる人にも身をまかせ奉公宮仕して成とも。児子を守立人となし。家の苗字を一つぎてくれよ。さあらバ我泉下にてよろこび。そなたの功労を感ずべし。とのみいひしとこれのことばいひもあへず腫物のいたみ甚しく。熱氣の往来たけしくて。胸もせまる無念の涙をうかべ

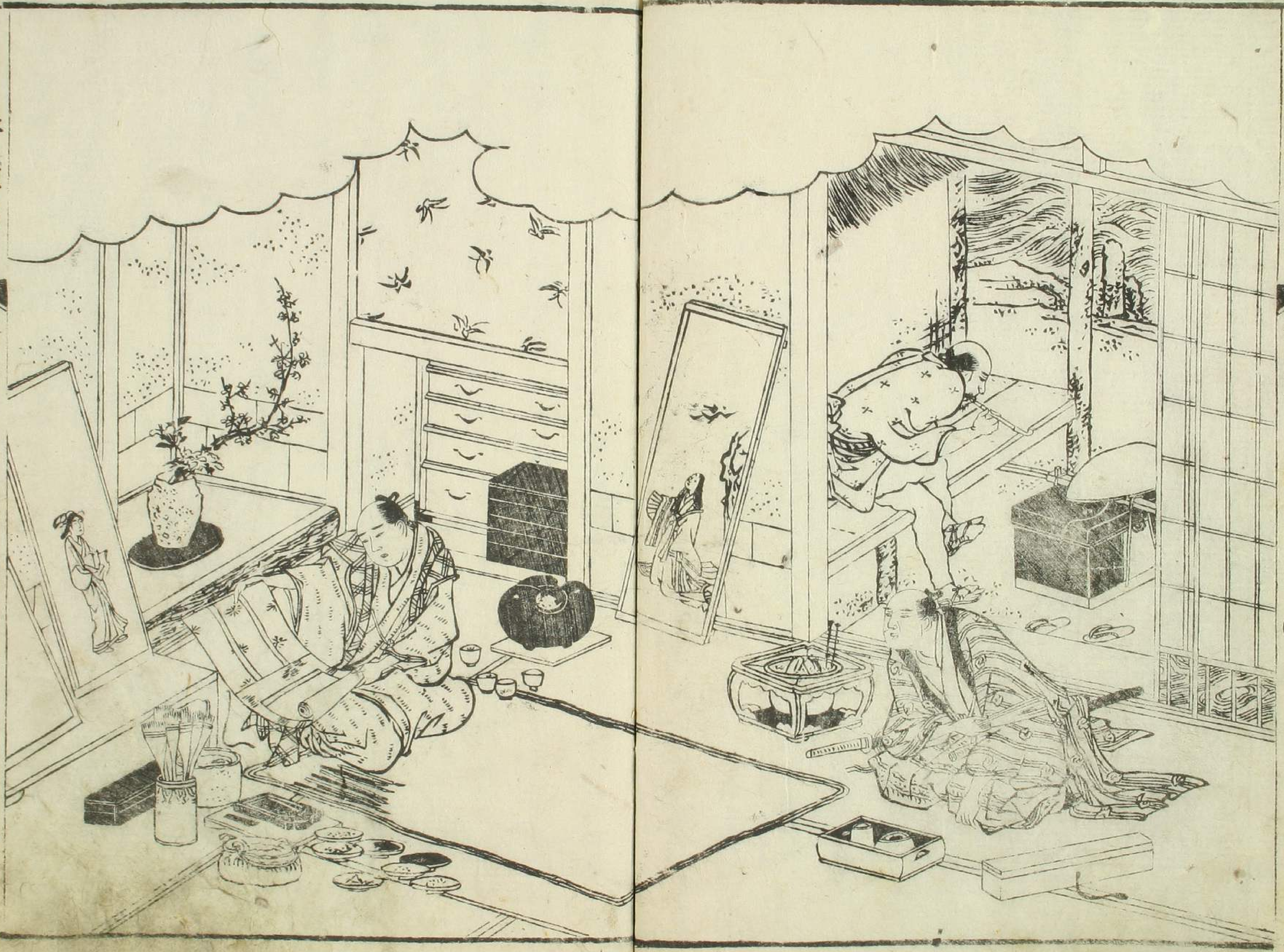
落しつゝ。痰咳しきれバむせ入りければ。妻ハ夢のこゝちして薬をあたへつ抱きおこしけり。漸く咳を撫さすり。母の眠りの醒といへバ声をも立ず哭けるが。夫の顔をうらめしげに見やりて。いかに貧苦にせまれバとて。日比にも似ぬ心の狭さよ。おん身自害してはて玉ひなバ。母人も生ていまさじ。妾とてもながらふべき覚悟にあらねバ。嫌ぎらんや。喜次郎ハ誰が残りて人となさん。此おん心ハつき玉ハぬや。さハいへつゝなれども。命ありてこそ。昨日も薬ハもとめしかども。これを煎べき薪なけれバ妾が髪のかざしを判じて。僅に買て薪にかへ侍り。寒き氣のつよき此時節ハ夜具さへなく炭火だになし。母人ともいひ。おん身の大病日ましに苦しさを病人よりもかなしかるこゝのうちぐさよ。人参とやらひて癒るとならバ。せめて此身の苦ハいとはじを女のちからハ身を責てもせんかたなきに。それともかなはぬハ因果ぞかしのあるまじかり。皇天にも仏神にも見はなされたる身のうへか。ともいひ病

世の報ぞといひて夫婦手に手をとり合せ声を吞てぞ哭ける。喜次郎ハ屏風の外にふし。陽眠して始終を窺聴しが。おさな心にも堪かねて一声啊とさけびて哭いだせバ夫婦ハ驚ろきいだせしぞとさらひながら。今の密話を聞てかとんづひぞ安からざるよ。喜次郎ハせきくる涙をおしかくしあきらかれハぞ苦をかさぬることよと思ひ。夢に物をみれておかえバ泣しとみりりて伯氣なふしさりしが。おもぶろ暁の鐘声耳にひゞきて老母ねむりと醒しけれバ妻女ハ共に枕にそひ薬を煎じ湯とよろび涙をかくしと袖のおさ。おのれとうふもおろかり。喜次郎ハ翌日も物かげにて終日泣居たるが行末をおぼつかなき御もあらバ此うへのさのくハ神仏の力のほかなしとおもひ付黄昏にまぎれて暗に家を出近き浜にて垢離を取那古寺の観音堂に参籠して仏前にぬかづきていのるし。一死かん是悟の父が命。病に危き祖母の命。先祖伝来の太刀の事も都て全さにあれど恙なし。南無千手観自在ねがはくハ大慈悲をたれ給ひ。今をさづけて貧苦病苦を救ひ給へ我妻にありてみじろぎもせじ。此ねがひかなはぬことならであらバ速我一命をとらせ給へといひて眼をとぢ気を静めて一心不乱に念じけるがその夜も漸く更けたり。頃しも厳冬の時節なれバ北風はげしく雪ともなひて寒き氣はげしく丸裸にてうづくまりし喜次郎が身をさすに恰も劍を以て肉を割がごとくなれども。原来氣丈の生れなるうへに一念の誠渾身にみちされバすこしもいたまざるのみか。寒き氣五臓にとほる通り。身上ハ冷て氷のごとくなれバ行をはてらるべき。忽ちたふれふして息もたえぐなりける

第二條

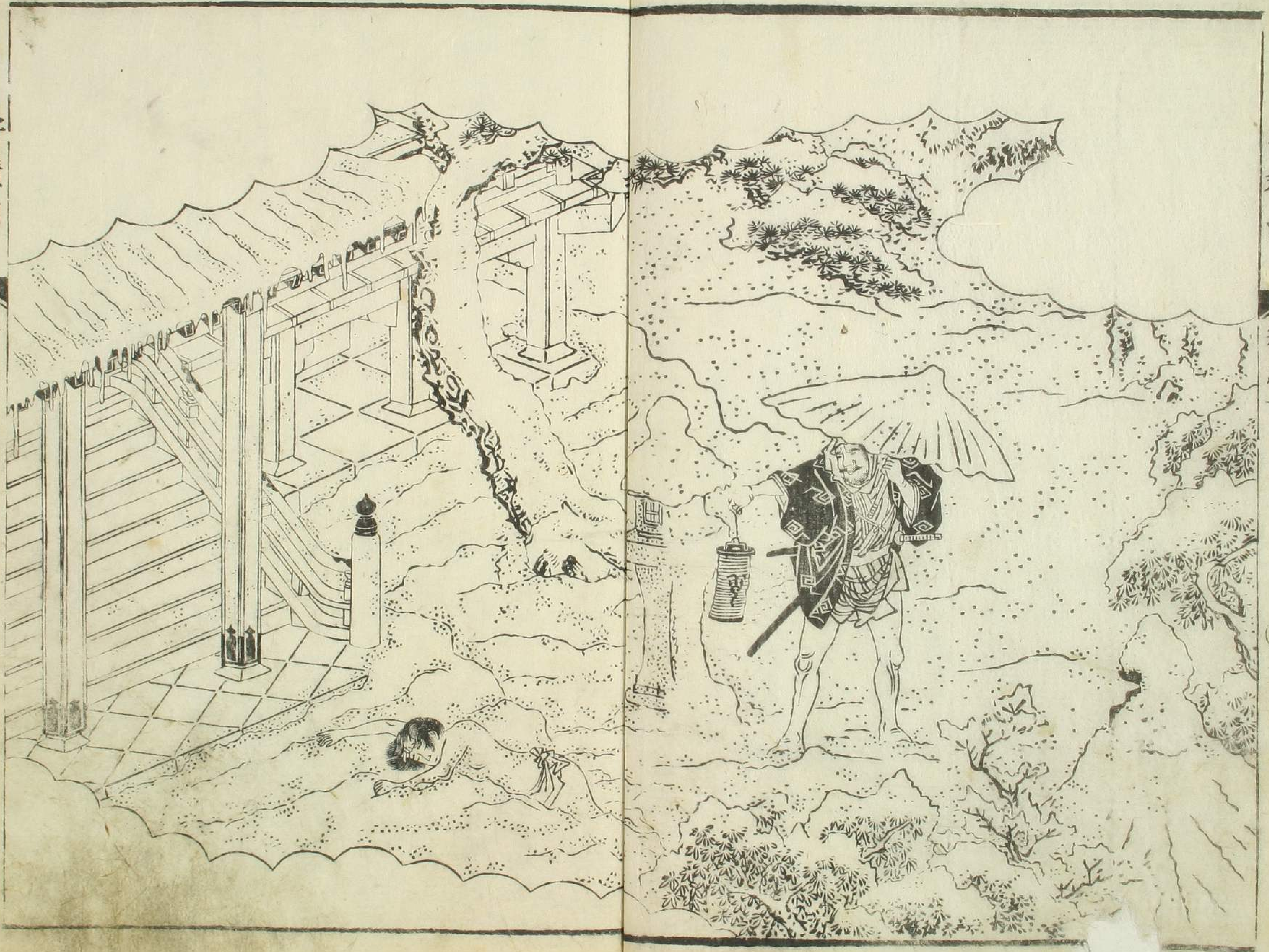
義親孝児售身救父母急事
并　死賊手奮家失宝刀事

爰に又みやじ村に。これも武士の浪人にて東雲平といふ者ありけるが此頃は



も那古寺に詣けるが。喜次郎が光景を見て大におどろき。いそがはしく走りより扶起してみるに命も危かりければ羽織を脱て喜次郎にうち着せ。近き家に抱き行て巨燵にあたゝめ。醒薬をあたへ。心をつかひていたはり漸々と甦醒けるが。父走りて彼処へ来らせしとぞ。これ居合る者ども引とめて様子をとへに喜次郎右のあらましと説り。此上ハいか程の奉公にも身を售て家内の危急を救ひさせよといひけるにぞ。ありあふ者ども一同に孝心のほどを感じけるも。雲平がいはく。年もゆかぬ身を年季きはめの奉公に出さんも高の知れたる給金なり。おん身がごとき美少年ハ。かし江戸の祢宜町へ身を賣て男娼のつとめをせバ。そこばくの金子を得べしといひけれバ。喜次郎よろこびていはく。望の如く金を得て家内の危急を救ふならバさしもけ身ハ八ツ割にさるゝとも生膽をとらるゝとも露ばかりもいとふべき所存なし。日比の強氣あらはれてうちびるけしきもなく。心を決していひければ。雲平かさねて幸ひ祢宜町の男娼家小藤の誕せるに参詣して我隣家に逗留せり。今夜のうちに相議して此ことよくとゝのへてハおん身ハ速家にかへるべしといひ人をやとひて母子を家に送らしめ。自己ハさて男娼家が旅宿へぞ赴ける。喜次郎家に帰りければ。父母ハいぶかりて汝何方へ行て夜中にかへりしぞとたづぬ。喜次郎答て観音堂へ立願のさめまゐりしといひて其夜をあかし。翌日未明に起て雲平が音信遲しと待居たる孝心のほどけなげにも又哀れなりけり。かくて其日の正午雲平が案内にて祢宜町の男娼家喜多内が宅に来りければ。喜次郎出むかへて兩人を裏にいざなひ。父母の前に手をつきていはく。祖母様といひ父上といひ。かゝる病にふしましまして貧苦にせまり給ふ。それのみならず先祖傳来の太刀を失ひし事をかなしみ入て父上御自殺と覚悟ましまする。前夜我陽眠して御物語の始終を詳に承

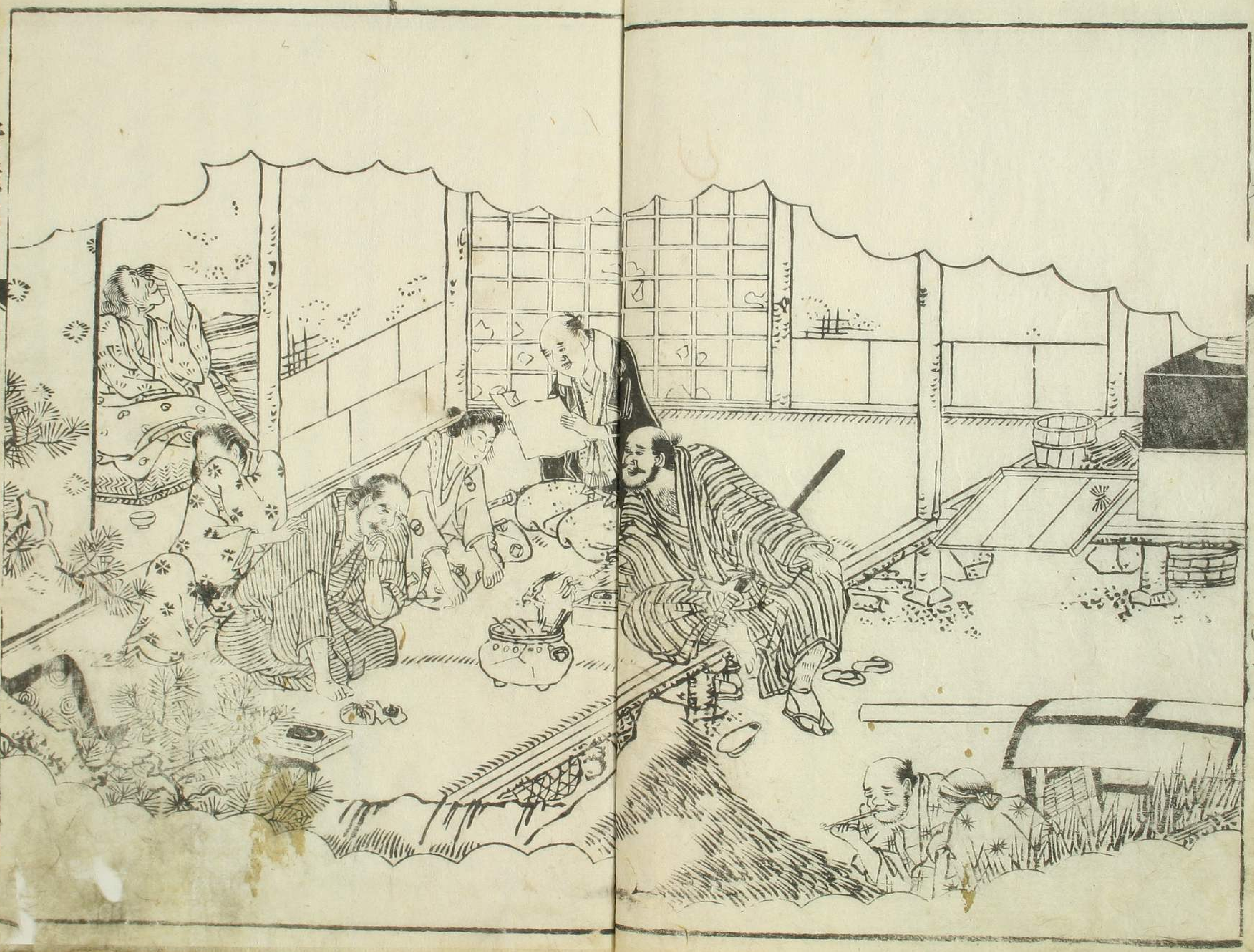
待かねたるが言もさらべきなれど子の為していふぞ。是をきのびねらん。我せめて金を得てゆきさる児(こ)わしきしがいかんともなべかれども。幼年(えうねん)の事なれば別(べつ)に施(ほどこし)を良(よし)計(はかり)なし。此事を聞ば雲平次(うんぺいじ)の祢宜町(ねぎまち)へ身(み)を售(うる)べきかと心を決(けつ)せりける件(くだん)しき話ひなんやといひて涙(なみだ)にむせびねぐひけり。祖母(そぼ)も夫婦(ふうふ)も余(あま)りに思(おも)ひかけざる事なれば二人(ふたり)顔(かほ)を見合(みあはせ)て一言(いちごん)の返答(いらへ)もなかりし。雲平(うんぺい)さらにすゝみ出(いで)ていへく。拙者(せつしや)もわかりし浪人(らうにん)の身(み)なれば。御身(み)の心底(しんてい)。いかんともせんすべかるを察(さつ)せり。志(こゝろざし)ある者あれど是等(これら)の事世(よ)にさらにうすさみしもあらねば。御子息(ごしそく)の志(こゝろば)にまかせ身(み)の代(しろ)をもて彼是(かれこれ)の負目(おひめ)をもつくのひ。人參(にんじん)の類(るい)をもとめて。なるべく養生(やうじやう)めされ。常言(ことわざ)に七倒八起(しちてんはつき)（ナナコロビヤオキ）とよぶあり。母御(はゝご)なる異日(いじつ)皇天(くわうてん)のめぐみにあひなば。ふたゝび天日(てんじつ)の面(おもて)を見(み)て。御子息(ごしそく)の身(み)に花發時節(じせつ)あるべし。拙者(せつしや)請(うけ)人(にん)とならんへば。今さらへつてのひまで何附(なにつけ)なりしも請(うけ)ごとさらん心安(こゝろやす)し。御子(ごし)息(そく)の孝心(かうしん)を水(みづ)の泡(あわ)とすまひぞ。これなる人は江戸(えど)祢宜町(ねぎまち)の男娼(やらう)家(や)なり。兼(かね)て拙者(せつしや)としたしき人なれば。昨夜(さくや)こゝを相識(あひしり)合(あひ)もなひて来(き)つるなり。證文(しやうもん)は判(はん)をおしたれども。今さらに其身(こ)の代金(しろきん)を渡(わた)すべしとのことなりといひて勧(すゝめ)しなれば。男娼(やらう)家(や)もその尾(を)につきて雲平次(うんぺいじ)のいふごとく。御子息(ごしそく)の生(うまれ)つき孝行(かうかう)といひ美貌(び)（ヨキキリヤウ）といひ。さらにまれなる少年(せうねん)なれば年(とし)限(ぎ)りを五年(ごねん)ときはめて身(み)の代金(しろきん)一百両(りやう)とさだめ。則(すなはち)今(いま)渡(わた)しやるといひて金(かね)をとらせければ。喜内(きない)涙(なみだ)ぐみ。声(こゑ)をあげ涙(なみだ)をおさへていふやう。いづれもの御(お)厚志(こうし)。児(じ)子(せがれ)が孝心(かうしん)その言(ことば)にはおよびもなし。拙者(せつしや)もむかしは武士(ぶし)の子孫(しそん)なれば。不幸(ふかう)にて零落(れいらく)すれども天地(てんち)の間(あひだ)に唯独(ゆいどく)のおひさきある児子(せがれ)を売(うり)て其(その)身(み)の代(しろ)で一命(いちめい)を保(たもた)んは。児(こ)の肉(にく)をくらふにひとし。先祖(せんぞ)へ對(たい)して何(なん)の面目(めんぼく)あらん。犬猫(いぬねこ)にもおとれりとなん。さらば我身(わがみ)を土(つち)をくらひて餓死(うゑじに)しもはすなりとも。さればこそいゝ



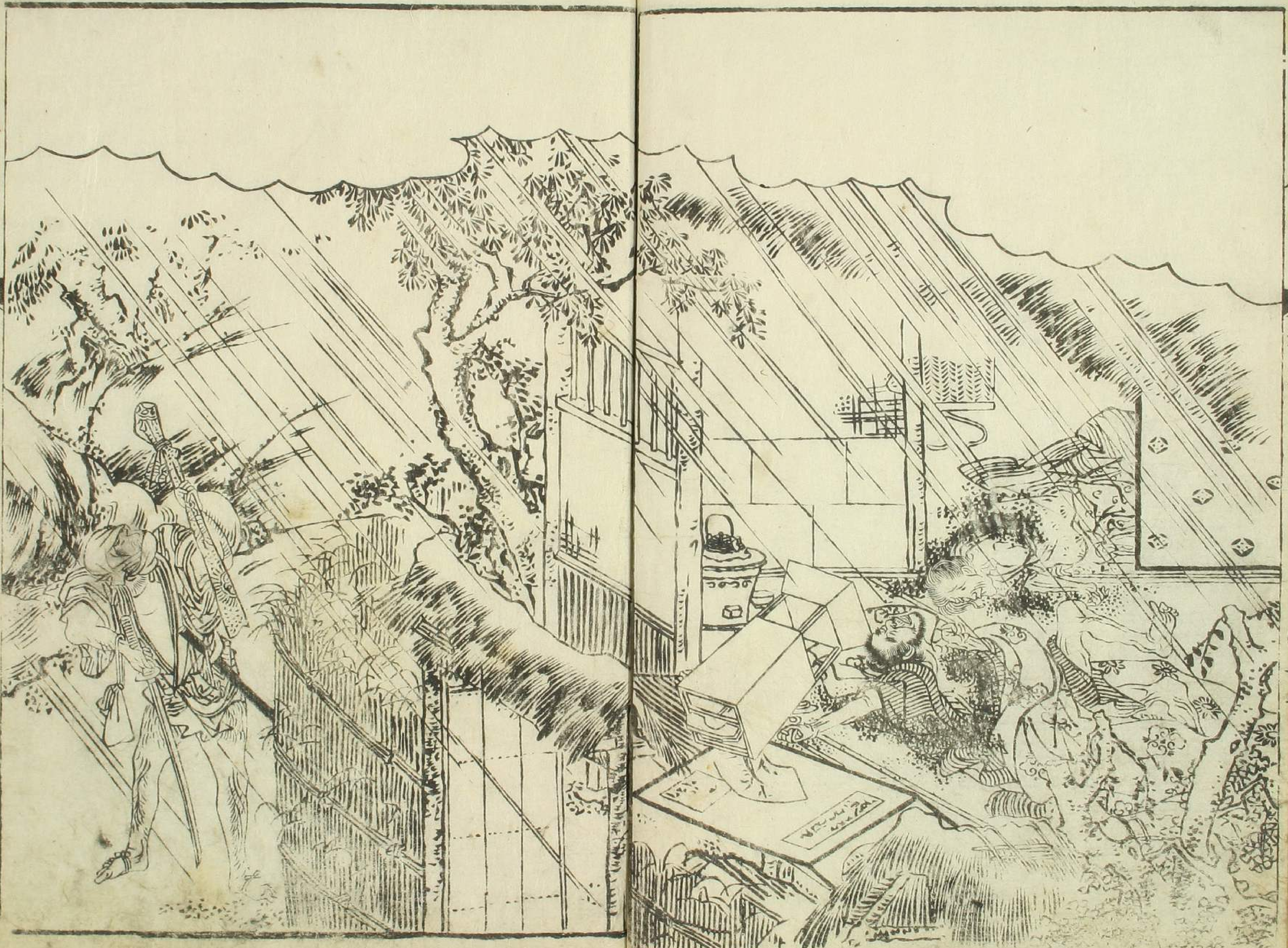
えみちて。さらに得心ハええざりけり。喜次郎ハうち志ほれて跪居しが。つとたちてさしたる刀をとりてぬきもちて。己ハ自殺せんとなるを。皆押とゞめさせて抱きとむ。祖母も行歩のかなはぬながら。病床をよろばひ出。やよ孫よ喜次郎よ。気短くてまそくふれか。とまれかくまれ其方が命ハ無にせまじといひて。涙をながしにさゞめけれバ。皆一同に立かゝりてやうやく刀をもぎとりぬ。喜次郎ハ嗚と吐息して。なかなか生ながらへて祖母様や親父様のおもしき苦痛を見んよりハいつそ死ぬるがましなるべし。いざ疾う死なせてたべと。うち嘆ぞこゝろなる。喜門ハ涙の目をおしのごひ。嗚呼石珍指を断て父の病を愈し。劉氏股を割て姑の疾を祈るの孝行も押るまじ。汝があさふる人参代ハ正是孝光が紫石英なり。日ごろ汝が火性短気といましめしが。年に似合ぬ丈夫の魂。我すでにかれ感心せり。その志めでゝハさしもいひそてもうらむまじ。汝が心にまかせなん。さんハいく年ごろやしなひの主人をそこそてつくへ。余生を安くさんと楽ミれ。おのれが年の老るもしらで。月日のたつをよろこびしが。運命つたなき親ゆゑに。いまだ年端もゆかぬ汝に賤き業のうき艱苦をいたさする事の不便さよ。此証文ハ不信と何とかのべてもあるべき。今此爾とも見ねバハ我家の児子なり。一度これをさづくる時ハ忽他家の人となる。いかんせんといひて。天に號地に哭。爾とゝる手もなかりきて。なをそしもつえんをありしバ。雲平ハ手をとりてやうやう爾とゝ忍させさう。祖母とも母とも喜次郎が左右よりつき。涙片手に額髪かきあげつ。思ひきる胸のうち。繰言のくに時移りぬるまでの両人ハかくてもあるまじき。用意の竹輿をとりよせ喜次郎を扶乗て名残ハつきねど。別を告て立出れバ。あとの嘆の哀さハ四子ハ別る。桓山の鳥もかくやと思はれて目も当られぬ光景なり。かくて果

べきれあらねば彼金を以て大医をむかへ高價の人參をもちひて療治させしかば老母も程なく全快し。諸方のおひめもつぐのひて。彼右力も尽すわざやうやく心を安めけり。誠是喜次郎がうむまれたる孝念の天に通ぜしならんと。聞人涙を拭ざるハなかりき。喜次郎ハ曽て絵を学び我門人にてありしゆへ。我もおなじく喜内が家にゆきかよひしが。喜次郎ハ別れてより。夫婦さみしくやもさびしければさびしかりね繰言をいひつゞけ。涙をおさへぬ日もなかりしに。我此嘆をとりなされしのびど。昔東福寺の兆殿司おのが母を絵にかうして古郷へ贈り母の心を慰し例もあれバ。偶おもひ付て。喜次郎が父母を一幅の絹に画きてやりけれバ。よろこびて喜内にあたへけれバ。夫婦大によろこび壁に懸おきて。これまで見子とおもひし如く。朝夕の食物ももちきりて。此絵にそなへ寒暑苦楽おりふしハ此息絵に對し。今のいますごとく語りてなぐさ

しんを慰めけり。かくて時光流水の如く。金烏玉兎の足とゞまらず。はやうつれ一とせとなりしが。喜内が家。別に又一件の大事こそいできたれ。彼東雲平。喜次郎が肖像の事を口入てより。格別に喜内としたしくなりけるが。原来此者悪黨にて。喜次郎が肖像を口入するも。実ハ男娼家より辛若識とゝろんさめの欲心ありて。実心なりてハなかりしを。後にぞしられける。此雲平。喜内が所持の来國俊の名刀をかねてめがけけるにや。一時終夜猛雨のそゝぎける事ありし。此夜に乗じて雲平喜内が家にしのびいり。床の下より喜内を刺殺し。名刀を奪て逃出るところ。老母眠りを醒し声をあげて。盗人ありとよばゝりけれども。これをも唯一刀にきりころし。いづくともなく逃去けり。大雨の夜にて物音も聞えざれバ隣家の者も都てこれを知ることなし。妻ハその夜同村の縁家のもとに仏事ありて行ぬ



られし。家にあらずして独一命をのがれられしも。老母夫の狂死といひ。先祖傳来の名刀をうばゝれしは。心神潘乱してつひに狂人となり。母夫ハ妾をすてゝゆくへおそせしぞ。名刀ハいまに志れずといひてくるひありきしが。年ごろ貧窮に神氣よわりしうへなれば。これもほどなく身まかりぬ。志かれ喜次郎ハ[illegible]の身なり。別に親族とてもなければ。郷人等があつかりて彼等が家財を賣代なし。二人の追善をいとなみけるが。其時此懸物も人手に渡りめぐりて貴所の御手にわたりしならん。これは此懸物の因果物語なりとくはしく説れしが。丹下嘆息していはく。孝子喜次郎が身を賣て一度父母の冤難を救ひしかども。再又父母が[illegible]のうへにあへなき死をとげたるは。正是前世の因縁のがるべからず。我身にも又此懸物につきて[illegible]ありとて。[illegible]に懸想し病となりし[illegible]。夢中觀音の告により。絵姿に似たる美[illegible]と索んため。関東にくだりし事まで。詳にかたりければ。師宣ハ奇異の思ひをなし。一ッにハこれ那古寺の觀音。喜次郎が孝心を感じ玉ひ。月老に令じて紅糸をむすび玉ひ。二ッにハこれ此懸物。喜次郎が父母の魂魄とゞまりて。良縁を惹しならんと感じられしが。丹下がいはく。縁を以て人の心を動せしハ。原是足下の絶筆神に通ぜし所なり。喜次郎事。美貌といひ孝心といひ。これ先祖よりしある武夫なり。彼一度[illegible]家ハかゝるといへども。[illegible]べきにあらば。皇天我をあはれみ玉ひて此よき婿をさづけ玉ふ。嗚呼よろこばし。我これより江戸にかへり。禰宜町[illegible]彼をよびて身を贖出して大和にともなひくらん。汝が望をとげしむべしといふ。師宣がいはく。そもしさあらば一死せる父母さぞ黄泉の下にてよろこぶべし。喜次郎が身を賣るハ。四年以前十二歳の時なり



べ。こしは已に十七歳なるべし。さるにても猶も更つらんが。其後の事は識らず。祢宜町にいたり。此證物に引合せて索ねけれど。まぎれあるべうもあらねば。ねんごろに告させんとせしが。丹下は御厚志のほど謝しつゝされど異日再まみゆべしといひつ。別を告てまかり出ぬ。師宣後に江戸に移りて村松町と云所に住。晩年剃髪して友竹といひけるとぞ。師宣が傳予が著本骨董集に記して詳なり。發行の時をまちてみるべし

安積沼巻之一畢